

## 週日の説教

金 大烈 神父 2009年10月29日(木)

《よい言葉に耳を傾け、信仰の姿に目を向けているでしょうか》

今日の第一朗読(ローマ8・31b 39)で、使徒パウロはこのように話されています。「**だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができましょう。**」そして、最後にこのようにも話しています。「**わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のものも、未来のものも、力あるものも、高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛からわたしたちを引き離すことはできないのです。**」

すごい確信ですね。なぜ私たちは、このような信仰、このような確信を持つことが出来ないのでしょうか。

使徒パウロは、イエス様が亡くなったあと、キリストを信じる人々を迫害するために、あちこちでものすごく活躍をした人物です。そしてある日、ダマスコという町にキリスト信者がたくさんいるという情報を得て、その人々を弾圧するように任命を受けて、駆けつけます。その途中で、イエス様に出会いますよね。馬から落ちたパウロにイエス様は、「サウロ、サウロ。なぜ私を迫害するのか。」と呼びかけます。そしてパウロは、目が見えなくなります。目が見えなくなったパウロは、キリスト信者のところに行き、そこである人の祈りによって目が開きます。

パウロは、このようなイエス様との個人的な体験ができたから、強い確信ができたのでしょうか。そして、その歩む道で聖霊の働きを体験できたから強い信仰を持てたのでしょうか。けれども、今の世を生きている私たちには、この使徒パウロのような体験はなかなかできないでしょう。そうしたら、私たちには使徒パウロのような強い確信や強い信仰は持てない、ということになるのでしょうか。

皆様、ある意味では、迫害の時代、悪が活発に働いていた時代は、恵みがあふれていた時代だったのかもしれませんが。どの国でも、迫害時代には、立派な殉教者、信仰を守ろうとする人々が、信仰の証をしました。それは、皆様もご存知だと思います。しかし今の時代、とくに日本では、信仰は自由です。誰でも教会に行けるし、自分の信仰を育てることができます。それなのに、自由になってから、教会の雰囲気は何となく生ぬるくなってしまったことを私たちはみんな認めています。もちろん、その中にも熱心な人は必ずいます。また、自分の命や精神を全部捧げて模範的な生活をする人々も沢山います。しかし、その方々は、使徒パウロのような体験ができたから、そのように強い信仰や熱心さを見せているわけではないでしょう。たぶん彼らなりに、神様に対する確信が出来るようになるような何かがあったのでしょうか。

今日の使徒パウロの手紙を読んでもう一回考えたいことは、「今の時代は、自分なりに方法を探さなければならぬ時代である。」ということです。悪というものは、私たちの一番弱い部分、触れればすぐに私たちが悪に陥るような部分を触ります。それによって、私たちはよくつまずいて転びます。だから私たちは、立派な方々、聖人の方々の教えに耳を傾けなければ、駄目になってしまうかもしれません。

命をかけて何日間も歩き、山を越え、川を渡って、身を隠しながら森に入り、涙を流しながらミサを捧げた先祖達が、私たちの近くにもいました。この頃、私たちの小教区が中心になり、隠れキリシタンの跡探しに取り組んでいます。それを通して、日本の先祖たちが、信仰を守るためにどの位苦労したのかがよく分かる気がします。では、なぜそのような心で、全てをかけ、信仰を守ろうとしたの

でしょうか。その先祖の姿と今の自分達の姿を比較し、考えなければならぬと思います。

この第一朗読を読んで、もう一つ、皆様をお願いしたいことがあります。皆様は、よく聖書をご覧になっていると思います。とくに、福音書にいつも接しているでしょう。しかし、更にもう一步信仰を深めるために、使徒パウロの手紙を一字一字ゆっくり読んでみることをお勧めします。時代を超えても、この方がどのくらい霊的に優れた話をしているか分かります。私は、同じ箇所を何度読んでも、びっくりすることがたくさんあります。「そのとおりだ。なぜ私は気付かなかったのか。」と思うことが、たくさんあります。いろいろな手紙があるのですが、毎日一つずつ読むとよいと思います。是非、試してみてください。

さあ、今日の福音（ルカ 13・31 35）に入ってみましょう。イエス様の時代の王様は誰でしたか？今日の福音でも紹介されているヘロデですね。このヘロデは『大王』と言われるくらい、政治的には優れた人でした。彼は、イスラエルの生まれではありませんでした。そして、それが一つのコンプレックスでした。しかし彼は、ローマの市民権を持っていました。政治的にもものすごく優れていて、人々を引っ張る力がありました。だから、政治的な業績やいろいろなことができる力を見込まれてローマから王として任命されたのです。今日の福音では、そのヘロデがイエス様を殺そうとしています。

ヘロデの一番偉大な業績は、エルサレムの聖殿を完成させたことです。起源前20年から46年かけ、紀元後26年に完成させました。それがエルサレムの聖殿です。その美しい聖殿を見て、イエス様は自分の心を傷め、嘆かれています。その聖殿は、当時の記録によりますと、ものすごく雄々しくて、華麗な建物だったそうです。しかしイエス様は、その聖殿の中で信仰の生活をする人々の偽善の姿を見て、心を傷められました。イエス様の目には未来が見えたのでしょう。石一つ残らず全て破壊されることが。今日の福音で、イエス様はものすごくいたとえをおっしゃいましたね。

**「めん鳥が雛を羽の下に集めるように、わたしはお前の子らを何度集めようとしたことか。だが、お前たちは応じようとしなかった。」**

これはイエス様の嘆きです。完成された聖殿を見て、このように心を痛めたと話されているのです。実際に、それから44年後、すなわち紀元後70年に、ローマのティトスという将軍が軍隊を従えてきてエルサレムの聖殿を攻めます。その時、聖殿の中にいたユダヤ人達にユダ独立運動が起こりました。ローマからの解放を目指す運動です。彼らは、命をかけてローマに抵抗しました。その抵抗が激しかったので、ティトス将軍は、結局、エルサレムの聖殿を破壊してしまいます。それによって、西の城壁以外は全て破壊されました。現在でも「涙の壁」と呼ばれる壁だけが残っています。

ですから、イエス様の預言はぴったり当たったのです。そしてこの話は、「お前らのために神様が遣わされた預言者を受け入れなかった。そしてみ言葉を拒んだ。それによってエルサレムはどうなるのか。おびえるその姿を考えたら、私の心が痛くてたまらない。」というイエス様の嘆きの言葉です。

では、今の時代はどうでしょうか。よいことを話している人に本当に耳を傾けようとしているでしょうか。み言葉を拒もうとする姿が、無意識のうちに私たちの中にもあるのではないのでしょうか。

こういうことを、いつも心に刻まなくてはならないと、今日の福音をとおして考えてみました。

ありがとうございました。